

# R

## KANSAI UNIVERSITY NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

# reed

No. 11  
July, 2007

関西大学ニューズレター  
発行日：2007年(平成19年)7月25日  
発行：関西大学 総合企画室広報課  
大阪府吹田市山手町3-3-35  
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121  
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



■インタビュー 田尻 悟郎 (関西大学外国語教育研究機構 教授)

## 「次の世代を育てる教師を育てたい」 — 1 “カリスマ英語教師”が関西大学へ — 「陸の上でボートの漕ぎ方を教えても意味がない」

■リーダーズ・ナウ — 5

在学生 — 文学部総合人文学科3年次生・金山 莉沙さん  
卒業生 — 刀匠・河内 國平さん

■研究最前線

主張する研究者として安全学の体系を目指す  
交通機関の安全性を追究し、  
事故防止対策を提案 — 7

商学部 — 安部 誠治 教授 (副学長)

金属錯体とDNAの相互作用を研究  
副作用のない制がん剤を目指す — 9

化学生命工学部 化学・物質工学科 — 中林 安雄 教授

■トピックス [学内情報]

平成19年度グローバルCOEプログラムに採択 — 11

東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成

大学院文学研究科 — 陶 徳民 教授 / 藤田 高夫 教授

■社会貢献・連携事業 / 地域・医療・福祉・工学連携

QOL改善に寄与する生活支援工学を構築 — 13

実証実験拠点「関西大学月が丘住宅」が稼働

インタビュー — システム理工学部 — 内山 寛信 教授

システム理工学部 — 倉田 純一 准教授

環境都市工学部 — 馬場 昌子 専任講師

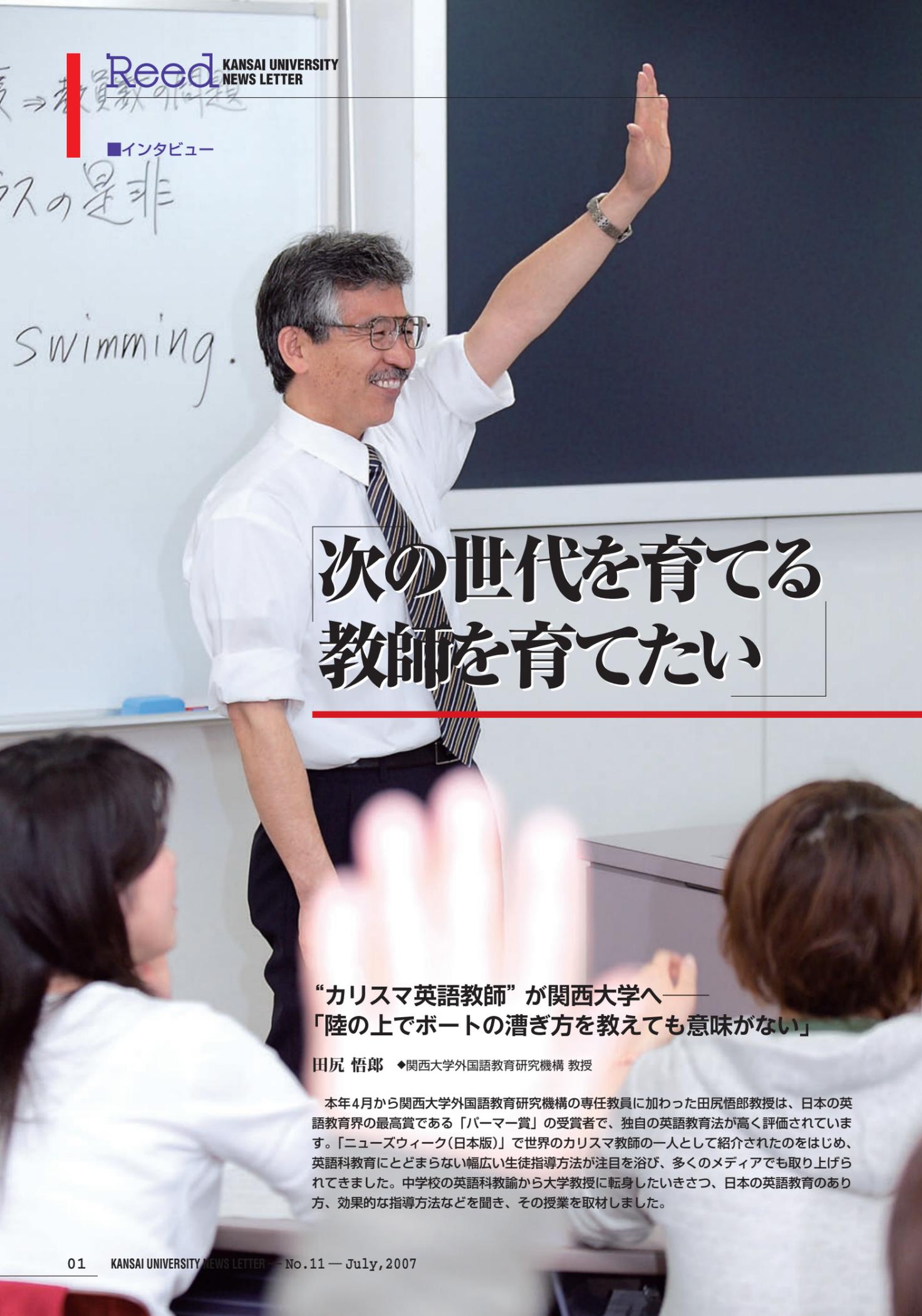
■関大ニュース — 14・15

学校法人福武学園と合併へ / 関西大学博物館が登録文化財に登録 ほか



博物館

Kansai University MUSEUM



# 次の世代を育てる 教師を育てたい

“カリスマ英語教師”が関西大学へ  
「陸の上でボートの漕ぎ方を教えても意味がない」

田尻 悟郎 ◆関西大学外国語教育研究機構 教授

本年4月から関西大学外国語教育研究機構の専任教員に加わった田尻悟郎教授は、日本の英語教育界の最高賞である「パーマー賞」の受賞者で、独自の英語教育法が高く評価されています。「ニューズウィーク(日本版)」で世界のカリスマ教師の一人として紹介されたのははじめ、英語科教育にとどまらない幅広い生徒指導方法が注目を浴び、多くのメディアでも取り上げられてきました。中学校の英語科教諭から大学教授に転身したいきさつ、日本の英語教育のあり方、効果的な指導方法などを聞き、その授業を取材しました。

## ◆生徒の発想に鳥肌が立ってくる

——バリエーション豊富な独自の教育方法は、どのようにして生み出されたのですか。

語学が一朝一夕に習得できないように、授業の方法も毎日の積み重ねの中で気がついていくことが多い。それは試行錯誤の連続です。

中学校の修学旅行で京都の嵐山へ行った時に、こんなことがありました。ボートに乗る前に、懇切丁寧な漕ぎ方の説明があったのですが、子どもたちはもう集中力が切れてしまっているので上の空です。いざ乗ってみると、漕ぐどころではない。ぐるぐる回転しながら流されていく。「怖い、先生助けて」と叫ぶ。こちらも大声で漕ぎ方を指示しました。

そこで、いくら説明しても、やってみないと分からないことに気がつきました。陸の上でいくらボートの漕ぎ方を教えても意味がないのです。ガイダンスをしたらずぐに水の中に入れて、自分で漕がせてみることに。じっと見ていて、ここが間違っているよと教えるか、生徒が分からない、どうしたらいいのといった時にアドバイスを与えるのが、先生の役目だと気がつきました。質問してきたら「じゃあ今から説明するよ」と言うと、みんなが聴くのです。ほとんどの授業は、生徒が教えてくれと言う前に説明を始めるでしょう。そうしたら彼らは聴きません。

生徒に主体性をもたせる授業に変えてから、みんなよくしゃべるようになり、出てくる発想が面白くて、そう来たか、なるほどなあと、鳥肌が立ってくることもあります。子どもってすごいなあと思います。授業のスタイルが変わってから、毎日感動があるのです。

関西大学では経済学部などで1年次の英語の授業も担当していますが、毎回とても勉強になります。学生さんは隣の人と相談し、勉強の手伝いをするなど、恐らくこの数年間したことがなかったはず。隣の人と話ができず、シーンとなっても、一対一で始めると必死で頑張ります。互いに親しくなってくるとペア学習、グループ学習もできるようになり、教室に活気が出てきます。今、すごく面白くなってきているところです。

## ◆同じ材料で人と違ったものを作る喜びを

——26年間にわたる中学校での英語科教育の経験から、日本の英語教育の問題点はどこにあるとお考えですか。

日本語では外国の人と話を通じないので、携帯電話のように英語を使う必要があるわけです。その携帯電話は最低限の機能、話ができるという機能があればいいわけで、それを正しく使える人間を育てることが最も大切なのに、機能を上げることばかりしているのです。子どもは携帯を使って外国人と話せた喜びから、自分で研究して性能を高めていきます。そういう気持ちにさせれば勝手に伸びていくのです。それを先生が押さえつけて、無理やり伸ばそうとしているのではないのでしょうか。

また、われわれが子どものころは、知識を手に入れたら良い暮らしができるとされた時代でした。テレビや冷蔵庫、クー



ラー、車が欲しいとなれば燃えるのです。今はすべて身の回りにあり、おなかいっぱい状態で意欲がわかない時代なのです。

それでも、今度のテストで400点を取ったら、あのゲームソフトを買ってやると言われると生徒はすごく燃えます。また、友達と何人かで勝負するという時は、驚くほど勉強します。空腹感と競争の意識があると燃えるのは、われわれの時代と変わりません。

——では、どのような授業が必要ですか。

まず、知識を詰め込むことではありませんね。それは冷蔵庫の中に食材を買って入れることであって、放っておいたら腐っていく。冷蔵庫を開けてその食材をテーブルに並べて、クラス全員が同じ食材でどんな料理を作るか勝負し、組み合わせで違ったものを作る喜びを味わわせることが必要です。人と違った料理を作ることで、意欲的に足りない食材を買いにいけはずですし、食材を手に入れるためには苦勞が伴うことも知ります。

英語の日記や自由な英作文のノートもそうですが、単語を組み合わせて新しいもの、人と違ったものを作る、いわばものづくりを経験させる必要があります。資源のない国が輸入をし、それを加工して、より良いものを作って生きてきた工夫ですね。次の世代を担う人に、授業の中でもものづくり的な経験をさせなければ、この国の将来は明るいものになりません。

英語日記は、私自身も勉強になりました。こんな表現があるのかと辞書を引きまくり、本当に使えるかどうかを外国人指導助手(ALT = Assistant Language Teacher)に聞いたりして、自分の力が伸びていくという経験をしました。

## ◆自分が楽をして教えることはできない

——英語の教科指導以外に、生活面を含む生徒指導の点でも、指導力が高く評価されています。

私が神戸で中学の教員になったころは、全国的に校内暴力の嵐が吹き荒れていました。最初の2年間は授業が成り立たないほどで、日々格闘し、本当にしんどかったですね。力づくで押さえることが決して正しいことだと思っていないので、家に帰っても家族に当たったり、風呂に入って叫んだり、常にいらしていました。授業がうまく行かない分、野球部の指導に力を注ぎました。

■インタビュー



田尻悟郎 (たじり ごろう)  
1958 (昭和33)年島根県生まれ。島根大学教育学部卒業。兵庫県神戸市の市立中学校教諭を経て、島根県の市立・町立の中学校5校に勤務。2007年4月関西大学教授に就任。2001年に財団法人語学教育研究所より「バーマー賞」を受賞。「ニュースウィーク(日本版)」(2004.4.28)で、世界のカリスマ教師の一人として紹介される。著書に「楽しいフォニックス」(教育出版)、「日本の英語教育に必要なこと」(共著 慶應義塾大学出版会)など。

毎年強いチームを築き上げている他校の野球部の監督に食いついて、指導の極意を聞いたこともあります。すごく厳しい先生なのに、いろいろな角度から子どもたちの良い点を見つけ出して褒め、やる気にさせる。「何のためにこの練習をするのか、試合でこういうプレーをしたい、こういう選手になりたい、そのために今こういう地道な練習をしているということ子どもが理解した時に苦痛ではなくなるんや。授業も野球と同じや」と言われて、目が覚める思いがしました。

自分が楽をして教えることはできません。学生・生徒にさせる分、こちらも付き合っ、先生もようやってくれていると思った時に彼らは初めて心を開くわけで、していない人間がやれと言っても続きません。

今も毎週、中学校の生徒指導の研修に呼ばれたり、荒れている学校の先生方のお話を聞いたりしています。やっていることを褒めてくれる上司、痛いなあと感じてもの的なアドバイスや納得できる言葉をかける上司がいるところは、学校が変わっていきます。学校でも、会社でも、次の世代を育てる上司がいるかどうかで決まってしまうと思います。

自分が楽をして教えることはできません。学生・生徒にさせる分、こちらも付き合っ、先生もようやってくれていると思っ、彼らは初めて心を開くわけで、していない人間がやれと言っ、

◆「教員を辞めて、教員養成をしなさい」

— 大学で教える道を選択した理由は？

年間100人ぐらいの方が授業を見に来てくださって、いろんな質問を受けるようになりました。毎日のようにお客さんがいらっしゃる、中学校の先生方も気を使っ、学年主任をしていましたので、生徒指導の時間も必要です。これだけ多くの先生方が困っ、カウンセリングのような形でかかわることができるのではないかと考えたことも理由の一つです。

それから、ドイツのシュタイナー教育に基づく英語教育の第一人者であり、広島大学大学院客員教授だったクリストフ・ヤフケ先生が私の授業をご覧になり、シンポジウムでディスカッションした際、「すぐに教員を辞めなさい」と言われたことです。「なぜですか」と聞くと「教員養成をしなさい」と。「僕は授業をもっとしたい、授業は楽しいし、感動がいっぱいある」と言う、「あなたは楽しいかもしれないが、その恩恵を被るのはあなたの生徒に限られる。もしあなたが先生方を育て、その先生の生徒たちがあなたの生徒のような思いができるようになれば、何万人という生徒が恩恵を被るのではないかとおっ、

もっと授業を続けたいというのはあなたのエゴだと言われたのが、きっかけになりました。また年齢的にも、次の世代を育てるべき時が来たと思っ、

◆英語科の教員である前に、教師であれ！

— 関西大学の印象はいかがですか。

まず、良い先生がそろっているということです。自分でもそう思っ、本学を選んだのですが、英語を専攻している学生たちが言うのです。質問に来た時などに「関大は楽しいか」と聞けば、「こんなにいい先生がそろっている大学はないですよ、最高です」と。

彼らは授業になって逃げられない立場になると、一生懸命やります。本気になればすごい力を出してきます。彼らの高い能

力を引き出してあげるのが仕事だと思うと楽しいですね。

大学生ぐらいになると大人になってきて、もう自分なりの考えを持って冷めてしまっ、あそこまで学生が変わり、中学生みたいに乗っ、一生懸命やるというのは、予想していなかつ、

— 今後、特に力を入れていきたいことは？

先生を養成するコースの英語科教育法では、まず英語科の教員である前に教師であるということをおし、教師というのは、次の世代の人を育てるのが仕事。教育は国をつくり、世界をつくっ、

一般教養では、英語って面白くないものだと思っ、入試で終わったはずなのにまだ英語を勉強しなければいけないのか、もう嫌だと思っ、彼らを引っ、いかなければならないので、さらに指導力を磨かないと思っ、この二つを同時進行しなければなりません。



また、荒れている学校からの依頼で、その原因を探り、先生方と一緒に解決策を求めて話し合っ、できる限り続けたいと思っ、生半可な努力ではいけないことを痛感しています。

教科指導と生徒指導を両立させる

●田尻教授の講義を聴く

関西大学外国語教育研究機構は2000年4月に開設されました。全学の学生に対し実践的な外国語教育を、教職課程の受講生に対しては、英語科教育法などの教科教育法科目を提供しています。現在、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・スペイン語・中国語・朝鮮語・日本語の専任教員37人が所属。また、同機構設立と並行して、文学研究科内に増設された外国語教育学専攻(修士課程)を展、



今年5月18日、田尻教授が担当する大学院の「外国語教育特殊研究(授業実践論)」の講義がありました。テーマは「中学校の英語の問題点と解決策」。英語教育の現場で予想される問題点として院生が挙げたのは、規律、教科書、学力格差、教師の英語力、評価、発達段階…。その中から、まず学力格差について検討するため、3~4人のグループに分かれて話し合っ、意見を発表しました。

解決策として、少人数・習熟度別の学習が提案され、田尻先生は「クラスを2つに分けたり、1つに戻したり柔軟に対応する必要がある」とアドバイス。習熟度別クラスの是非については、「できない子がコンプレックスを持つ」などの反対意見が多く出されました。その解決策を探り、英語でのコミュニケーションのあり方、ペア学習が成功するポイントとうまく行かない要因などを考えました。



●授業を受けてよかったというものを残す

授業では、田尻先生は絵の入った単語カードのコピーを配り、具体的な使い方を説明しました。生徒が楽しみながら力をつける方法は、長年の経験が蓄積された田尻先生の十八番です。歌や映画はもちろん、ゲームやクイズ、面白い手作りの小道具などを活用し、楽しんで学び、夢中になって英語を使うところまで持っていきます。添削しコメントを添えて返す英語自主学習ノートは、1年間に1万5千ページになったと言います。

「日本で暮らしていくなら英語を使わなくても生きていけるのに、年間105時間、3年間で315時間も耐えて教室に座っているわけですから、やっぱり授業を受けてよかったというものを残してあげないといけない」



生徒主体の授業スタイルも、特色の一つです。一対一で行う口頭の小テストでは、実力がついた生徒を先生役にして、お互いにやる気を引き出します。一方、教師は一層の配慮が必要な生徒と一対一で向き合います。教科指導と生徒指導を両立させる方法が、今、注目を集めています。

## プレーを身近に体感 喜びを共に

学生のスポーツ文化をはぐくむ  
「体育会44部の発展に寄与したい」

関西大学体育会本部 関大スポーツ編集局 編集長  
●文学部総合人文学科3年次生 金山 莉沙 さん

「強い関西大学」を先導しているスポーツが今、とびきり元気がいい。体育会44部の活躍ぶりを伝える学生新聞「関大スポーツ」の紙面にも、活気みなぎっている。勝負の瞬間から日ごとの練習まで、選手たちの動きを見逃すまいと追いつながら、関大スポーツ編集局員は地道な活動を続けている。関大が共に楽しみ喜ぶ新聞が手元に届くまでには、東奔西走する取材、徹夜も辞さない編集作業がある。「学生新聞の原点に立ち返り、マイナー競技の普及にも役立ちたい」と金山莉沙編集長は語る。

# LEADERS NOW!



金山 莉沙 — かなやまりさ  
■1987(昭和62)年大阪府生まれ。帝塚山学院高等学校卒業。文学部総合人文学科英語英文学専修3年次生。2007年1月から関大スポーツ編集局編集長。

つながります」

継続して取材していると、選手の人間性に触れることができる。「すごく大人になったな」と感じることも。刷り上がった新聞を手配りしていると、「あれ、読んだよ」「おもしろかったで」という声を耳にする。「その一言がうれしくて、新聞作りの意欲がわいてくる」と言う金山さんに、編集方針などを聞いた。

「有名選手やメジャー競技の記事だと、読者の多くが食いつくかもしれないけれど、一番身近な体育会員が『いつも人気競技ばかりで、僕たちのマイナー競技は載らない』と思い、読者層もコミュニケーションの幅も拡大しない。だから、メジャー競技は今まで通り、マイナー競技に対しては今まで以上に取材体制を確立することをモットーにしています。

よく『カンスポにしか書けない記事』と言われます。しかし、読み手の『読みたい』と、書き手の『書きたい』と、書かれる側の『書かれない』が三位一体となることは難しい。良い記事を書くためには、選手個々のプレースタイルを研究するか、大学のプレースタイルを学ぶのは大前提で、その上で部の雰囲気や一人ひとりの選手を熟知し、日々のコミュニケーションを大切にすること。少なくとも、相手がストレートなもの言いができるように、その人に合う接し方を探して、コメントを引き出す努力をするようにしています」

金山さんは、小学3年生の時に書いた詩が新聞に掲載されたことがきっかけで、新聞を読むようになった。昨年の秋、放送局でアルバイトをし、報道に携わる仕事に就きたいという思いが強くなったという。編集長の役に次の人にバトンタッチするまで、関大の勝利の瞬間に立ち会い、喜びを共にする機会は何度もありそうだ。そこには広告塔ではないスポーツ文化の豊かさがある。

## 古来の日本刀の技を 伝承する

国宝・七支刀などの古代刀剣を復元  
「努力と辛抱ができれば、素質があるといえる」

●刀匠  
河内 國平 さん — 法学部 1966年卒業 —

刀匠・河内國平さんは関西大学の学生時代、二人の人生の師に出会った。一人は人間国宝の刀匠、宮入昭平。著書に感銘し、4年生の夏休みに学生服姿で長野県を訪ねていくと、師は弟子と共に山にこもって炭焼きをされていた。進む道が決まった。もう一人は榎原考古学研究所の初代所長で、関西大学文学部の教授だった考古学者・末永雅雄。河内さんは法学部の学生だったが、文学部の末永先生の研究室をよく訪ねた。それが古代刀剣の復元に心血を注ぐことにつながった。

「僕は師・宮入昭平と末永雅雄先生に影響を受けて、いまだに刀を作っている。この人たちに恥をかかせたらあかんと思っています」

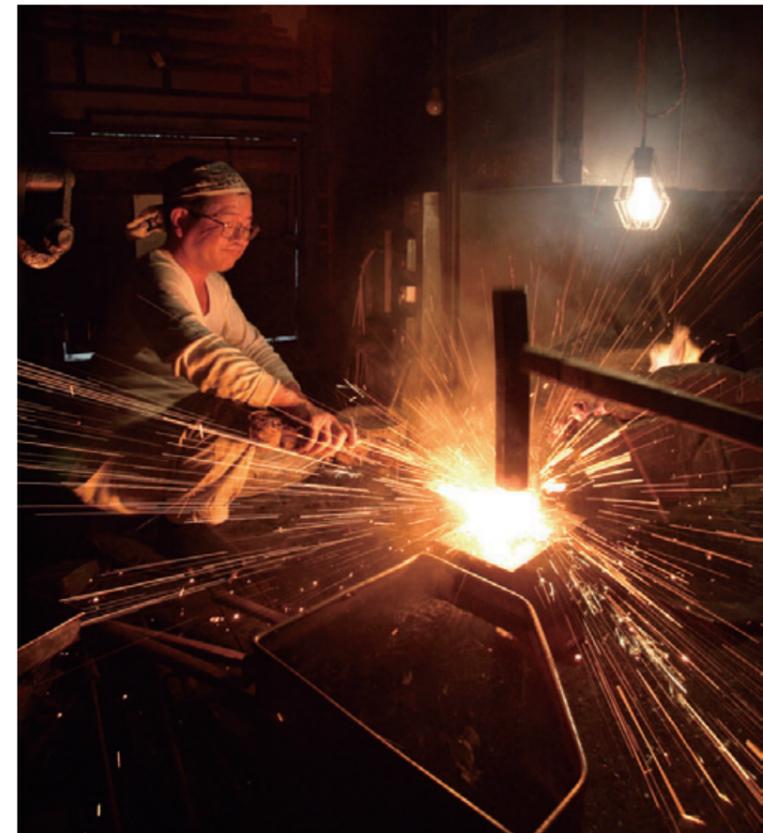
河内さんは第14代刀匠河内守國助の次男として生まれたが、刀鍛冶で生活が営める時代ではなかった。物心ついた時、父親はすでに刀の仕事から離れていた。関大時代は「邦楽部の活動が99%」と言うくらい、尺八の演奏と邦楽仲間との交歓に燃えた。

人生を決定づけた宮入昭平著『刀匠一代』は、4年生の新学期が始まったころ、友達に教えられて知った。阪急百貨店の書籍売り場で手に入れた。「1週間ほど寝られないくらい」衝撃を受けた。「本の最後に『せめて一人でもよい、将来を託せるような刀鍛冶が生まれてくれないかと、そればかり切に願ってやみません』とあり、自分が呼ばれているような気がしました」

ハヶ岳山麓の炭焼き場で宮入昭平に会った後、河内さんが大阪に戻ったのは、秋の試験と卒業式の時だけだった。幸い、必要な単位は2科目しか残っていなかった。卒業後5年間、盆と正月以外は師匠のそばで暮らした。

「愛刀家でもあった末永雅雄先生は、宮入昭平に入門することを話すと喜ばれ、心配もしていただきました。大学の正門のところまで送ってくださって、高齢だった先生は『苦節十年だぞ、お前が帰って来るまで生きていたいなあ』とおっしゃり、時々励ましの手紙もいただきました」

河内さんは末永博士の指導の下、石上神宮(奈良県天理市)に伝わる国宝の七支刀を、日本刀と同じ鍛造で復元した。鍛造とは、赤く熱した鉄をたたいて刀の形を作り出す製法。河内さんは四苦八苦して何とか仕上げたが、七支刀は鍛造ではなく鑄造ではないかという疑問を持ち続けてきた。鑄造は、鑄鉄と呼ば



撮影・宮田昌彦(写真上)



河内 國平 — かわちくにひら  
■(本名 河内道雄)1941(昭和16)年、大阪市生まれ。第14代刀匠河内守國助次男。66年、関西大学法学部卒業。宮入昭平(後に行平に改名)に入門、相州伝を修める。72年、独立し奈良県東吉野村に鍛刀場を設立。七支刀、稲荷山鉄剣、藤ノ木古墳出土土刀・剣などを復元。84年、再度人間国宝・隅谷正峯に入門、備前伝を修める。榎原考古学研究所古代刀剣研究会委員。東京芸術大学大学院美術研究科非常勤講師。奈良県指定無形文化財保持者。

れる炭素の量が約2%を超える鉄を1500度くらいの高熱で溶かし、土や石の鑄型に流し込んで形を作る製法。二十数年来の疑問を解くため、河内さんは鑄造グループの人たちと七支刀を鑄造で復元することに挑戦した。その成果が昨年の2月から3月にかけて、奈良県立榎原考古学研究所附属博物館で「古代刀剣の復元——七支刀の製作技術と刀匠河内國平の世界」と題して特別陳列された。

「プロなら正宗や一字などの古名刀と勝負せなあかん」。河内さんは日本刀の技を伝承していくために、炭切りから始まる古来の製法を守っている。非常勤講師を務める東京芸術大学では、作刀を講義・実演してきた。若者に対しては——。

「職業はもちろん大切だが、人間を探して生きてみるのも面白い。僕は宮入昭平に惚れて、この人についていこうと思った。親方の葬儀の時、火葬場で僕は親方の右手の骨を拾った。これが僕に伝わっていると思った。素質があるとかセンスがいいとかいう言葉は、言い換えると努力と辛抱ができること。努力と辛抱のできる人間は素質があるといえる」

■研究最前線

主張する研究者として安全学の体系を目指す

## 交通機関の安全性を追究し、事故防止対策を提案

ヒューマンエラー、システムの欠陥などが連鎖して起こる組織事故を防ぐために――



●商学部  
安部 誠治 教授（副学長）

商学部で公企業論や非営利組織論の授業を担当している安部誠治教授は、交通機関の安全性とリスクマネジメントの専門家として知られています。2005年4月に発生したJR西日本・福知山線の大惨事は、鉄道の事故防止対策の不備を浮き彫りにしました。公共交通システムや公益事業のあり方について研究し、社会的な活動にも取り組んでいる安部教授に聞きました。

### フランスの「交通権」を紹介、公共性を研究

《昨年3月に、いわゆる「運輸安全一括法」が衆議院で可決されました。その際、安部教授は国土交通委員会の審議に参考人として召喚され、意見を公述しました。また、パロマ社製のガス瞬間湯沸かし器で相次いだ一酸化炭素中毒事故では、事故原因調査を目的に設置された第三者委員会の委員長を務めています。安部先生が安全をテーマに、交通機関のマネジメントの研究にかかわるようになったのは――》

大阪市立大学の大学院生だった1979年から80年にかけて、パリ第10大学に留学していた時、「交通権」という考え、理念に出会いました。その考え方は82年12月に施行された「国内交通基本法」の中に盛り込まれました。それを私が、わが国に翻訳し紹介しました。それ以来、市民の権利という視点から交通の公共性とはどういうものかを研究テーマとしてきました。

日本では80年代、破たんした国鉄の経営再建をめぐる問題が一大争点となっていました。私はフランスの公企業の問題を中心に研究しつつ、国鉄の問題にも関心を持っていました。結局、国鉄は1987年4月に分割・民営化され、JR各社が誕生しました。その際、経営再建の面ばかりに目がやられ、安全の確保という極めて重要な問題は十分な検討が加えられませんでした。

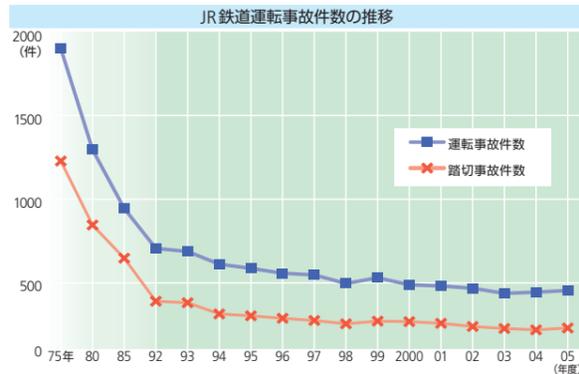


2005年	3月	土佐くろしお鉄道・宿毛駅衝突脱線事故(1名死亡、11名負傷)
	4月	JR西日本・福知山線脱線事故(107名死亡、562名負傷)
	12月	JR東日本・羽越線脱線事故(5名死亡、33名負傷)
2006年	1月	JR西日本・伯備線接触事故(3名死亡、1名負傷)
	9月	JR九州・日豊線脱線事故(6名負傷)
	11月	JR西日本・津山線脱線事故(25名負傷)
2007年	3月	JR北海道・石北線踏切障害事故(51名負傷)

### ■国鉄の分割・民営化で安全性は向上したか

《民営化の4年後、1991年5月に信楽高原鐵道の正面衝突事故が発生しています。民営化により、日本の鉄道の安全性はどう変化したのでしょうか。鉄道の民営化と安全性の関係について――》

JR各社の経営陣は、分割・民営化後、JRの安全性は向上したと主張しています。その根拠となっているのは、鉄道運転事故が総件数で減少したという点です。確かに運転事故の総件数は、87年以降、大きく減少しています。しかし、これは踏切の施設改善などが進み、踏切事故が大幅に減少したことによるものです。踏切事故を除いた事故の件数はほぼ横ばいで、減少はしていません。運転事故の総件数が減ったから鉄道の安全性が向上したとは言えないのです。



●出所＝国土交通省「平成17年度鉄道事故等の発生状況について」などにより作成。

また、安全に影響を及ぼす恐れのある事故以外の事象、インシデントといわれる小さなトラブルについては、全く考慮されていないのが問題です。国土交通省のデータによれば、JRの列車百万<sup>千</sup>当たりの輸送障害件数は、87年以降、著しく増加しており、2005年度は87年度の実に2.8倍となっています。輸送障害件数の推移を在来線と新幹線別に分けて詳しく見てみると、在来線のそれは87年度の1,398件から05年度には3,870件へと激増しており、新幹線も同じ期間に43件から68件へと増加しています。

インシデントに当たる輸送障害は事故の予兆であり、輸送障害件数の増減は鉄道の安全性の現況を映し出す一つの指標です。輸送障害の現状から見る限り、分割・民営化以降、むしろ鉄道の安全性は低下していると言わざるをえません。

### ■起こりうる事故の芽を事前に摘み取るために

《JR西日本の福知山線事故は、国鉄の分割・民営化以降、最悪の鉄道事故になりました。107人が死亡し、562人の乗客が重軽傷を負ったこの脱線転覆事故は、時速70<sup>千</sup>の制限速度が設定されたカーブ区間に、110<sup>千</sup>を超える速度で列車が突入したことが直接の引き金となって発生しました。この区間に仮に速度を強制的に減速させる保安システム(速度照査式のATS)が導入されていたら、この事故は起こらなかった可能性が高いと言われています。また、速度超過の背景にある規制緩和による競争激化、運転士の労働条件やストレスなども指摘されています。今後、このような事故を防ぐためには――》

運転士のヒューマンエラーをバックアップする仕組みが講じられていたら脱線は起こらなかったはずで、それを怠っていたJR西日本に組織としての瑕疵があったと言えます。ただし、運賃やダイヤに至るまで許認可制や届け出制である以上、国土交通省の監督や指導が適切であったかどうかとも問われるべきです。鉄道事業者任せにするだけでは、鉄道の安全は担保できないのです。政府の適切な規制や所管官庁の適正な監督、さらには事故調査機関による事故調査活動や研究機関による安全研究の推進なども必要です。

鉄道事故は、ヒューマンエラーや車両・装置・機器の故障、システムの欠陥、環境的要因などが複雑に連鎖して発生する組織事故です。事故の原因を徹底的に調査し、そこで得られた知見・教訓を再発防止のために活用することができれば、鉄道の安全性は大きく向上します。つまり、鉄道の技術やシステム、マネジメントの欠陥を洗い直し、事故原因となった諸要因を改善することで、起こりうる事故の芽を事前に摘み取るのです。

その場合、事故調査は当事者である鉄道事業者や刑事事件捜査を行う警察ではなく、専門的な第三者機関の手によって行われなければなりません。公平かつ中立、科学的な立場で行われる第三者機関による事故調査こそが、真に事故の再発防止に役立つからです。

### ■独立した第三者機関による事故調査が必要

《鉄道や航空機の事故が起こった時、事故調査機関の代表としてアメリカのNTSB(National Transportation Safety Board)が話題になります。日本の調査機関との違いは？また、安部先生の今後の研究や社会活動などについて――》

NTSBと同種の事故調査機関は、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、スウェーデン、フィンランド、オランダなどでも設置されています。日本では2001年に航空事故調査委員会を改組する形で、航空・鉄道事故調査委員会が発足し、鉄道事故の分野でも専門的な事故調査機関の活動がスタートしました。

日本の場合、NTSBなどと比較すると、いくつかの難点があります。第1に、委員会は国土交通省内に置かれており、運輸行政からの独立性という点で不十分です。航空も鉄道も、被規制事業ですから、運輸行政のあり方が安全性の確保に大きく影響します。事故調査を行う場合、運輸行政の適否の問題点を検証する必要があります。NTSBの場合、運輸の安全性向上を目的として出される「勧告」の相手先の7割弱がアメリカの運輸省など行政機関に対するもの、残りがメーカーや航空・鉄道会社に対するものです。

第2に、組織規模が貧弱である点です。NTSBの予算規模は、日本の60倍ぐらいの差があります。私たちは、消防活動のために納税者1人当たり年間1万円ほどの税金を払っていますが、航空・鉄道事故調査委員会の年間予算を国民の数で割ると、わずか1円ほどです。事故防止のために予算を拡充し、調査部門をはじめ各部門を充実させる必要があります。

アメリカでもNTSBは当初は運輸省の下にあったのですが、独立しました。日本の事故調査委員会も国土交通省から独立させ、真の第三者機関にしていく活動に取り組みたいと考えています。そして、研究者としての大きな課題は、安全学の体系をつくり上げることです。安全を確保するためには、技術だけでなく、インシデントの分析などソフトの分野、マネジメントや組織の問題も重要です。その成果を事業経営の中に組み込むべきだと主張していくつもりです。

■研究最前線



金属錯体とDNAの相互作用を研究

副作用のない  
制がん剤を目指す

ルテニウム錯体の制がん作用を追及し、  
新しい光化学療法剤開発へ

◎化学生命工学部 化学・物質工学科  
中林 安雄 教授

制がん剤を用いる化学療法は、外科手術、放射線療法と並ぶがんの3大治療法の一つですが、副作用などの問題があり、決定的な治療法になっていません。日本人の3人に1人ががんで死に至る時代を迎え、サイエンスの力を結集した効果的ながん治療法の開発が待望されています。化学生命工学部の中林安雄教授は、金属錯体とDNAとの相互作用を研究し、錯体化学の領域から新しい制がん剤への応用に取り組んでいます。

■DNA合成を阻害し、がん細胞を抑制

—まず基本的なことですが、錯体とは？

金属イオンの周りに配位子と呼ばれる分子やイオンが結合した一群のものを、一般に錯体(complex)といいます。例えば、銅イオンの周りにいろんなものが規則正しく結合しますが、決まった数しか結合できません。また血液の中のヘモグロビンは、酸素を運ぶ重要な部分が鉄の錯体となっています。ですから鉄分が不足すると貧血になるのです。

多くの金属錯体は特有の色を持っています。これは可視光を吸収するというので、光のエネルギーを蓄える物質と考えることもできます。また、錯体は化学反応を制御・促進させる触媒として用いられています。錯体の領域は広く、無機化学と有機化学の両方にわたっています。

—代表的な制がん剤であるシスプラチンは、どのような錯体なのですか。

シスプラチンは白金の錯体です。非常に強力な抗腫瘍活性を示し、激しい腎毒性、吐き気、難聴などの副作用があるにもかかわらず、世界中で広くがんの治療に用いられています。特に欧米では、最も高頻度で使用されている制がん剤の一つです。わが国でも1983年に制がん剤として認可を受けて以来、従来の制がん剤の投与では治癒することが不可能とされていた多くの種類の固形がんに対して鋭い切れ味を発揮しています。

—シスプラチンが制がん剤として作用する原理は？

細胞内でのシスプラチンのターゲットがDNAであることは、培養細胞でのDNA、RNA、タンパク質の合成速度を比較する

ことによって分かります。DNA合成のみが阻害されます。DNAの複製を阻害することで、がん細胞の増殖を抑え、制がん効果へとつながるのです。すなわち、白金ががん細胞のDNAに結合することにより、DNAの修復機能を妨げて、それ以上増殖しないという原理です。

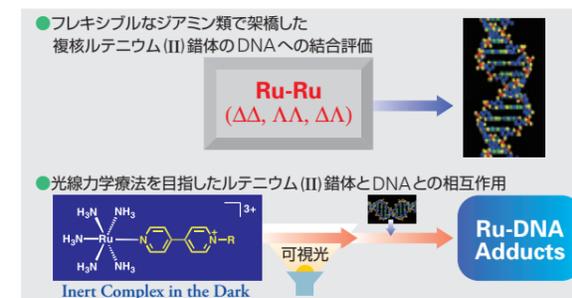
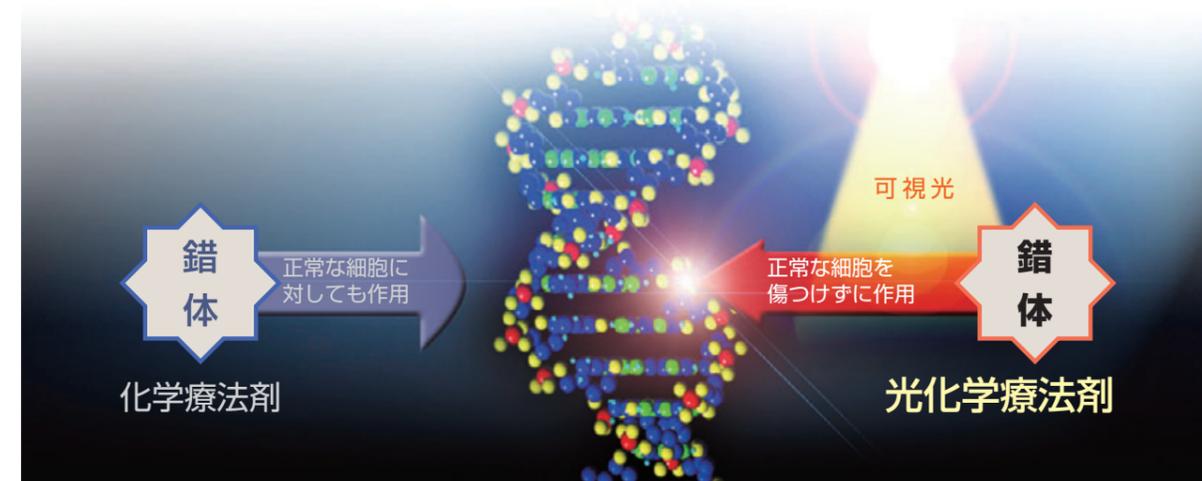
■ルテニウム錯体がDNAを選択的に結合

—問題は、効果があっても副作用があるということですね。

そうです。シスプラチンのデメリットは副作用が非常に大きいことに加えて、耐性ができてしまうことです。最初は効くのですが、そのうちにだんだん効かなくなってきます。そこで、われわれは副作用のない、新しい制がん剤を作ろうと、実験を重ねているところです。

—どのような方法を用いて、がんを抑えるのですか。

白金以外の金属を使ってもできるのではないかと考えて、ルテニウムを使用しています。大きく分けて二つの方法があります。一つは基本的にシスプラチンと同じような原理ですが、シスプラチンは白金一つで、DNAと結合する形が決まっています。一方、複核ルテニウム錯体を用いて、ルテニウムとルテニウムの間を架橋する配位子にいろいろ使えば、いろんなところでDNAが結合する可能性があります。ジアミン類で架橋した複核ルテニウム錯体は、DNAのグアニン塩基のみに選択的に結合することが分かりました。ルテニウムとルテニウムの距離に応じて、どこに結合するかということも解明できると思います。



制がん剤としてのルテニウム錯体の化学療法(上)と光線力学療法(下)への応用

■酸素に依存しない光化学療法剤を開発

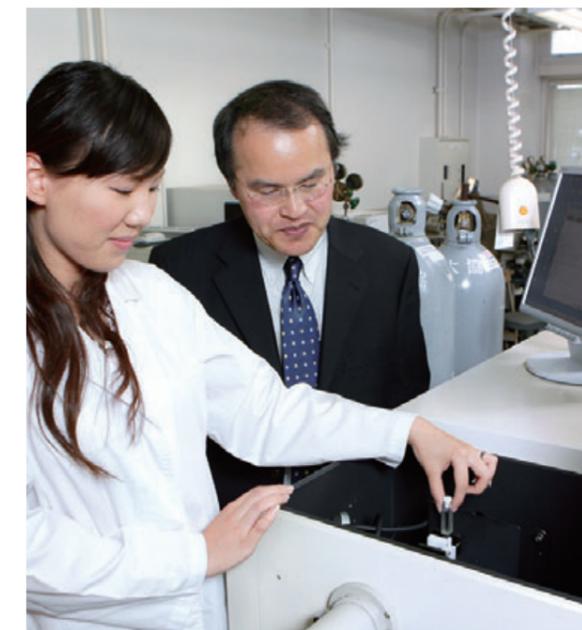
—もう一つの方法は？

錯体がDNAに近づき、そこに光など別のエネルギーが当たることによって、DNA自身を切断し、がん細胞をつぶしてしまう方法です。先に説明した光を用いない方法は、がん細胞に届くまでに正常な細胞に対しても作用してしまう可能性があります。後者は光を当てなければ何も反応しないので、正常な細胞を傷つけることはなく、副作用の点から非常に有望です。これは「光線力学療法」といわれる方法で、われわれはさらに一歩進めた方法を考えています。

—それは現在の光線力学療法とどこが違いますか。

光線力学療法は、レーザー光と腫瘍親和性を有する光感受性物質により、腫瘍細胞のみを選択的に壊死させる治療法です。現在の光線力学療法は、錯体に光を当てて活性化し、錯体と酸素が反応して発生した活性酸素がDNAを切断するという原理です。われわれが使っている錯体は、その作用のほかに、光を当てて錯体自身を分解することによって、それがDNAに結合し、制がん作用を出そうというものです。

その目的は、酸素に依存しない光化学療法剤の開発です。多くの悪性のがん細胞は低酸素状態にあり、酸素の必要性は欠点になるからです。酸素のないところに光線力学療法は使えず、活性酸素を発生させられません。酸素があってもなくても、光を当てると錯体自身が分解してDNAに結合するような化合物ができれば、どんな条件でもがんにも効くと考えられています。



■実際のがん細胞に使用する応用段階へ

—今までの成果と今後の展開について。

国立がんセンターでヒト培養がん細胞を使ってスクリーニングしてもらった結果、炭素が四つつながっているルテニウム錯体は、今までにないような作用を持つ物質であると期待されるという結果が得られました。それを使って、さらに研究を進めていきます。

また、酸素に依存しない光化学療法剤の開発の方は、光照射で配位子の脱離が起こり、錯体を分解させてDNAに結合させ、がん細胞がそれ以上修復できなくなるという効果が期待できます。われわれの錯体に制がん作用があり、DNAにアタックしてDNAを切断するという事は分かっています。次は実際にそれをがん細胞に使って、どこまで効くのかということまでやってみようと考えています。

平成19年度グローバルCOEプログラムに採択

## 東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成

—周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出—

### 複合的な視点から「文化交渉学」を発信

平成19年度のグローバルCOEプログラムに、関西大学が申請した「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成—周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出—」が採択されました。今後5年計画で「文化交渉学」という新たな学問分野を切り拓き、国際舞台で活躍する関西大学発の若手人材を育成する教育研究拠点を形成していくことになります。拠点リーダーの陶徳民教授(大学院文学研究科総合人文学専攻・中国文学専修)とサブリーダーの藤田高夫教授(大学院文学研究科総合人文学専攻・史学専修)に意気込みを語っていただきました。



### 平成20年度に「文化交渉学専攻」博士課程を開設

採択されたグローバルCOE拠点は、東アジア世界における文化交渉の諸相を教育研究対象とし、地域文化の相互接触・衝突・変容・融合を動的に把握する「文化交渉学」という新たな学問分野の創生を目的としています。これは東アジアにおける文化を、多様な国々からの視点で、複数の人文学的方向から複合的に把握することのできる人材を養成するものです。

人材養成と研究の拠点としては、文学研究科を改組し、平成20年度に「文化交渉学専攻」を博士課程前期課程・後期課程同時に開設します。本プログラムの核となる後期課程においては、学生の半数は留学生とする予定です。

### グローバルCOE◆世界をリードする創造的な人材を育成

今年度から始まったグローバルCOEプログラムは、文部科学省が実施してきた「21世紀COEプログラム」を受け継ぐ事業です。わが国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的としています。

今回は全国の国公私立大学111校・281件(私立大学は36校・59件)の申請があり、28校・63件が選ばれました。このうち私学で採択されたのは、本学を含む4校・10件のみでした。

### 「関西大学のアジア学の資産と伝統を継承し、国際的発信力を持つ若手研究者を育てたい」

基盤となる研究資源と拠点形成の目的

●大学院文学研究科総合人文学専攻・中国文学専修  
陶徳民教授 (拠点リーダー)



われわれは、関西大学のこれまでのアジア学の伝統を継承し発展させていくことが重要だと考えています。本学には可能性に満ちたアジア文化研究の基盤となる学術資源がそろっています。江戸時代に懐徳堂、適塾と並び称された私塾である泊園書院の2万冊余りの「泊園文庫」。東洋史学の創始者である内藤湖南博士の蔵書3万3千冊を有する「内藤文庫」。魯迅研究者で魯迅の弟子であった増田渉氏(元本学文学部教授)の「増田文庫」1万5千冊。日本を代表する書誌学者の長澤規矩也博士の「長澤文庫」。外交官の吉田伊三郎氏が収集したアジア関係・外交関係の和漢洋書2400冊。日本近世文学の第一人者の中村幸彦氏(元本学文学部教授)の「中村幸彦文庫」など。これらの文庫が常に図書館にあり、特に貴重なもの以外はいつでも教員や学生が触れることができます。豊富な学術資源へのアクセスの良さも、本学の研究環境の特長です。

また、アジア文化交流研究センターでは、中国の典籍1万種全文の総合データベースである世界最大規模の「中国基本古籍庫」を、他大学に先駆けて導入しました。稀覯書の文字デー

タ・版画像の連結データベース「近代漢語文庫データベース」もあります。

この日本有数の研究環境が、今回のグローバルCOEプログラムを実施する基盤になります。この事業を推進するメンバー13人は、全員が関西大学の教員であり、東アジアというエリアと文化交渉というテーマに接点を持つ研究者が集まっています。このコアのメンバー以外に、外部の先生方にも参加してもらいます。リーダーシップを発揮できる若手研究者を育てるために、最短距離で世界最高水準に接することができる環境を提供する予定です。

教育研究拠点形成の目的をまとめると、次の通りです。

#### ◆複合的アジア文化観を持つ人材の育成

東アジア世界を多対多関係の織りなす文化的複合体としてとらえ、それに立脚して学術研究のみならず、国際交流や国際理解のための機関・組織で主導的役割を果たす人材を養成する。

#### ◆国際的発信力を持つ自立した若手研究者の輩出

世界標準としての3カ国語(英語、2アジア語)の運用能力を持ち、グローバルな人的ネットワークの中で世界水準を意識しながら活動できる自立した若手研究者を養成する。

#### ◆新たなディシプリンとしての文化交渉学の構築

「周縁アプローチ」による研究視角の転換と文化接触の動的把握によって、従来の一国主義的な東アジア文化研究を革新し、文化交渉学という学問領域を新たなディシプリンとして世界に先駆けて構築する。

#### ◆国際的研究ハブの形成

各国で個別に行われている文化交流研究・対外関係史研究などを国際的ネットワークで結びつけ、東アジア各地域の文化研究をリードする国際的教育研究機関を形成する。

### 「国とディシプリンを越境する研究で、新たに東アジア文化像をとらえ直そう」

グローバルCOEプログラムの内容と特徴

●大学院文学研究科総合人文学専攻・史学専修  
藤田高夫教授 (拠点サブリーダー)



#### ◇「文化交流」から「文化交渉」へ

関西大学の今までの蓄積を「文化交流」という枠組みでくくるなら、今回われわれが「文化交渉」という別の言葉を使ったのは、より広い学問体系として文化交渉学というものを構築するためです。

ぜひ越えたいものが二つあります。一つは国を越えたい。日本と中国という一国対一国の関係ではなく、東アジア全体を視野に入れて考えていきたいのです。もう一つ越えたいのは、各学問分野の垣根です。例えば、歴史学、言語学、文学、思想、宗教といった学問分野の中でやってきたことを、その枠を越えて互いにそれぞれの考え方や成果をぶつけ合わせていきたい。

若手研究者に越境してほしいのは、国とディシプリン。この二つを越えて、それぞれの確実な研究蓄積の上に、同時に他の学問分野に対して開いていく姿勢を身につけてほしいし、それが従来の文化交流研究をさらに発展させていくことになると思います。

### ◇フィールドワークを伴う現地調査を実施

中国研究を例にとると、従来の中国研究は、最も中国的なコアな部分に集中して、そうでない周縁部分をそぎ落としてきました。つまり、中心の部分から中国文化のエッセンスを抽出しようとする研究方法です。しかし、そのように切り捨ててきた周縁の部分にこそ、実はたいへん豊かな可能性を持ったものがあると考えています。むしろ周縁に立脚して、周縁から中心を見ることによって初めて見えてくる中国文化像の提示は、周りにいる人間だからできることです。これを「周縁アプローチ」と呼んでいます。

具体的なテーマはいろいろあるのですが、院生やポストドクトラルフェローのような若手研究者を、文化交渉上の重要地域に送り込むというプロジェクトを計画しています。例えば、絶えず外国との窓口であった長崎や対馬、琉球、アモイ、マカオ、台南、シンガポールなど、さまざまな異文化との接触の現場となったところで行う、フィールドワークを伴う現地調査を組み込んだ教育プログラムです。これを「周縁プロジェクト」と呼んでいます。

若いうちから20年後、30年後にそれぞれの国の学会を背負って立つであろう研究者との世界的なネットワークを、自ら構築しつつ歩んでほしい。一定の業績をあげて外国に出て行くというのではなく、最高水準の世界が初めからすぐそばにあるような環境で、リーダーシップを備えた創造的な研究者を育てたいと思います。

さらに、COE拠点の最終形態として、文化交渉学研究機構の下に独立大学院「文化交渉学研究科」の設置も視野に入れていきます。

■社会貢献・連携事業  
地域・医療・福祉・工学 連携

## QOL 改善に寄与する 生活支援工学を構築

実証実験拠点「関西大学月が丘住宅」が稼働

■インタビュー

内山 寛信 教授 ◎システム理工学部  
倉田 純一 准教授 ◎システム理工学部  
馬場 昌子 専任講師 ◎環境都市工学部



内山 寛信 教授 倉田 純一 准教授 馬場 昌子 専任講師

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業の一つである「学術フロンティア推進事業」に選定された「高度福祉社会のQOL改善に寄与する生活支援工学構築のための実践的研究」。その拠点となる「関西大学月が丘住宅(QOL改善提案モデル)」が2月に竣工した。本施設は、幅広い共同研究を通してQOL(Quality of Life, Quality of Living)にかかわる改善・提案策を実証するための実験住宅として、千里山月が丘地区に建設された。プロジェクトを担当するのは、内山寛信教授(研究代表者)をはじめ、機械工学、建築学、材料工学などを専門とする理工系3学部の10人の教員。既に大学や企業との共同研究が進んでいて、地域のりびとや医療・福祉関係者にも利用されている。プロジェクトの狙いや特色、今後の展開などを聞いた。

### ◆「地域、医療、福祉、工学」が連携

— プロジェクトの経過と目的について。

内山 学術フロンティア推進事業に採択されたのは平成18年度ですが、それより2年前から先端科学技術推進機構の中で研究グループを発足させました。今年2月に竣工したこの建物(月が丘住宅)自体、2年間の共同研究の成果を踏まえた作品として提示しました。

最近では大学に社会貢献が求められています。特にQOL改善に寄与する生活支援の分野では、一人ひとりの特性に応じた対応が望まれます。従来、大学が研究成果を社会に還元していた



ルートとは違うやり方をしないと、社会に貢献することは難しい。この住宅を地域に開放し、研究成果を社会へ還元する場としても利用してもらいます。高齢者や障害者、医療・福祉関係者の直接的な評価を得て、「実践的に使える生活支援工学」の構築を目指しています。

倉田 研究の目的は、生活支援機器・環境の開発・提案はもとより、他の研究機関や企業と連携し研究活動を行う連携研究拠点の形成、「地域、医療、福祉、工学」が連携して高度福祉社会での生活を支援する社会連携支援モデルの構築です。

機械学会の中でもいくつかの部門で、それぞれ開発したり評価したりしています。しかし、一方的な研究ではなく、使う人の立場に立って、その人にとって一番良いのは何かを考え、設計の工夫をしていかなければなりません。このプロジェクトには、生活支援工学という新しい学問分野を切り開く狙いがあります。

### ◆体験・シミュレーション・実験の3ゾーン

— 当プロジェクトの特色は？

馬場 住宅や介護機器の展示場とは根本的に違います。困っている方が来られたら、その解決策を見つけていくという極めて実践的な生活問題解決型である点が特色です。大きく分けると体験ゾーン、シミュレーションゾーン、実験ゾーンがあり、各ゾーンに対応する研究コンセプトがあります。

居住体験ゾーン(リビング)は、障害者・高齢者には調理が負荷の高い作業となっていることに注目し、体形や運動機能障害の度合いによって最適と考えられる調理環境を導き出します。ガス会社と共同開発したL字キッチン、市販のキッチンと比較して最小サイズです。L字の折れ部分に立つことで、歩行困難な場合でも手すりに身を預けたまま、ほとんど動かなくても調理ができる設計です。

動作シミュレーションゾーンでは、尊厳のある自立生活を営む上で最も重要な生活行為である排泄に注目し、便房の大きさ、便器の高さ、取り付け姿勢などをきめ細かく調節可能な設備を配置し、運動機能障害の有無による空間設計の変化を検討します。



倉田 実験ゾーンでは、光環境実験室を設けています。光環境は作業効率の面からではなく、「住まう」ことに直結し、生活環境に適した照明条件を提案することが必要です。また、生活時間の大半をベッドの上で過ごす場合、視界にあるのは窓の風景や天井であるため、外部の景観と照明との兼ね合いや室内照明による視覚への刺激が、高齢者・障害者に対して心理的变化を及ぼすことが考えられます。

### ◆データ収集、評価・計測方法を整備

— これからの展開について。

馬場 ここには、良い例も悪い例もいっぱい仕込んでいます。例えば、立ち上がりやすい手すり、立ち上がりにくい手すりを設定しています。実は失敗事例を最初から仕込んだのではなく、工事担当者のバリアフリーに対する意識によって出来上がりが左右されることになったのです。

デザインの領域は、結論を出していかなければなりません。いろんな経験則を踏まえて解答を出していくために、その裏付けになるデータを集め公開していくつもりです。

倉田 改善し、答えを見つけるとともに、評価や計測の方法も検討していきます。例えば車いすの場合、基礎的運動機能や操作評価、身体計測、体験による感性試験評価、生活様式の聞き取り調査などによって、短期間にその人に合った車いすを供給することが可能になります。将来的には、ちょっとした故障などを短時間のうちに修理できるワークショップ機能なども、このような支援拠点に求められると考えています。そのためのデータベースが必要であり、まずは評価方法、計測方法を整備していきたいですね。

内山 視点ができましたので、専門分野を超えた共同研究を一層推進していきたいと考えています。データを取るためには、利用者の方に手間をかけることもあります。ぜひ協力していただきたい。車いす一つとっても、今はユーザーの方が機械に体を慣らしているというのが現実でしょう。実際に使ってみてどういう問題があるかを掘り起こさないと、QOLの改善に結びつきません。

また、健常な方にも来て体験していただきたいですね。みんなが意識改革をしていかないと、障害をお持ちの方との間でボランティアな精神が生まれてこないと思います。

## KANDAI NEWS

### 大阪大学と学術交流協定を締結

関西大学は大阪大学と教育および学術研究上の協力関係を推進するため、学術交流協定を締結した。6月11日の調印式には、河田悌一学長、宮原秀夫・大阪大学総長ほか、両大学の副学長らが出席。今後、共同研究、講義、シンポジウム等の実施および研究者、大学院生、学部学生などの交流、情報や資料の交換などを行う。

### 東京センター技術交流セミナーを開催

これまでの産学官連携活動を関東圏において

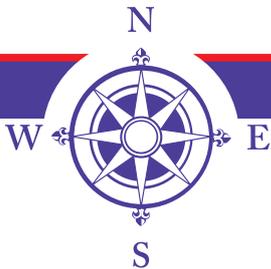
さらに推し進めるため、東京駅に隣接する関西大学東京センターで、今年度から「関西大学技術交流セミナー」を開催。理工系の研究者による研究報告と意見交換を、来年の3月まで11回のシリーズで実施している。第1回は4月13日に開かれ、オープニングセレモニーの後、越智光一・化学生命工学部教授(副学長・社会連携推進本部長)のセミナーがあった。

### 教育後援会が創立60周年記念式典、アイスショーを開催

関西大学教育後援会が7月1日、創立60周年を祝う記念式典とアイスショーを開催した。竣



工1周年を迎える関西大学アイスアリーナ(高槻キャンパス)に、本学アイススケート部名誉顧問に就任された日本スケート連盟会長の橋本聖子氏を招いて式典を挙げる。アイスショーでは、今年入学した有力選手の澤田亜紀さん、北村明子さん、金彩華さんと、世界を舞台に活躍する織田信成さんらが華麗な演技を披露した。1947年に発足した教育後援会は、大学と家庭との「心のかけ橋」をモットーに、教育懇談会、就職説明会などを実施している。



## 学校法人福武学園と合併へ

### 野球とサッカーの強豪・北陽高校が 関西大学第2の併設高校に

学校法人関西大学と学校法人福武学園(大阪市東淀川区、福武道裕理事長)は、2008(平成20)年4月1日を期日として両法人を合併させることについて合意に至り、3月15日、基本契約を締結した。合併後、学校法人福武学園は解散し、同法人が運営する北陽高等学校は「関西大学北陽高等学校」に名称を変更する。

北陽高等学校は、1925(大正14)年に設立された80年の歴史を有する男子校で、これまでに3万人を超えるOBを世に送り出している。スポーツの北陽としてつとに有名だが、2008年度から共学化とともに教育改革を進める。

関西大学は、これまで併設の高校は1校しかなく、既存の併設校の活性化のためにも、かねてから併設校増設が切望されていた。今回、福武学園から統合の申し入れを受諾することになった最も大きな理由は、福武学園の建学の精神・教育理念への賛同による。すなわち、福武学園は本学の理念である「学の実化」を提唱された故・山岡順太郎学長のご子息、山岡倭氏が創設された学園で、山岡順太郎先



関西大学で行われた調印式(3月15日)で握手する森本靖一郎理事長(写真左)と北陽高の福武道裕理事長(同右)

生の理想とされた教育理念が息づいており、本学の併設校に足るにふさわしい学園と判断したからだ。

現在、合併に向けた具体的な協議を鋭意進めている。特に、関西大学への進学など生徒のニーズに一層応えられるような教育改革を実現するため、同校の歴史と伝統、特色を尊重しながら充実を図る。



## 関西大学博物館が登録文化財に登録

関西大学博物館として親しまれている「簡文館」が平成18年度の「登録有形文化財(建造物)」の一つに選定され、3月16日、文化庁から発表された。関西大学の建築物では初めての登録であり、学内に現存する建物の中では最古のもの。

簡文館は、1928(昭和3)年に大学図書館として建築され、1955(昭和30)年に増築された。その増築部分が1967(昭和42)年に文化勲章を受章した建築家・村野藤吾氏(1891~1984)の作品であることや、大学の図書館施設として代表的なものの一つであり、大学がそうした建物を保存しようとしたことなどが選定理由となった。

村野氏の設計による大きな増築工事は、関西大学創立70周年記念事業の一環として実施された。現在、博物館の事務室と展示室になっている円形の部分と、「なにわ・大阪文化遺産学術センター」となっている書庫部分がこの時の増築。この円形建物は戦後の急激な学生増に伴い、開架閲覧室として設置され、以後、学生や教職員の教育・研究の中心的役割を果たした。

## 特別企画展「簡文館ものがたり」を開催

関西大学簡文館が国の登録文化財に登録されたことを記念し、同館内にある年史資料展示室では、4月8日から特別企画展「簡文館ものがたり」を開催。千里山キャンパスには、この簡文館や円神館(現ITセンター)など、村野氏が設計した建物が数多くあることも紹介されている。

簡文館は、図書館から博物館と年史資料展示室を備えたギャラリーへと変貌してきたが、その温もりと親しみ、美しさは今も変わらない。

